

しかし、大学とは教育・研究機関である。こうした性格に鑑みると、研究ばかりでなく、学生を入学させ、教育カリキュラムを持つ教育機関としての性格を明確にもつ組織こそが、東京外国語大学の前身として理解することがふさわしいものと考ええる。その組織とは、一八五七（安政四）年正月十八日に開校した「蕃書調所」（のちに開成所かいせいじょと改称）であった。

なお、「蛮書和解御用」という用語であるが、江戸時代においても「蕃書和解御用」や、「阿蘭陀書籍和解之御用」等さまざまな呼称で呼ばれていたといわれている（沼田次郎「蛮書和解御用と蕃書和解御用」「歴史と地理」二八九号、一九七九年）。しかし、「安政六己未年調 天文方代々記」（大崎正次編『天文方関係史料』一九七一年所収）では「蛮書」という語は一八五五（安政二）年十二月頃から使われ始め、それまでは「蘭書和解御用」と記されている。これは、「蛮書」あるいは「蕃書」という外国に対する「夷狄」觀念に基づく表現が、攘夷思想の高まりとともに強く現れてきたものであることを示している興味深い。そこで、以下においては「天文方代々記」の用法に従い、一八一一年設立当初は「蘭書和解御用」と表記する。

二 江戸時代における外国語需要

「鎖国」体制下の外国語需要

江戸時代は、いわゆる「鎖国」という体制をとっていた。「鎖国」といっても、完全に国を閉ざしていたわけではなく、異国（外国）と接する場所を限定し、幕府がそれらを直接的、間接的に管理・統制する体制を「鎖国」と表現するにすぎない。すなわち、オランダと中国との接点となる幕府直轄の貿易都市長崎と、朝鮮との窓口となる対馬藩、

琉球との接点となる薩摩藩、異民族であるアイヌとの接点となる松前藩の四か所を通して、江戸時代にも異国と接していたのである。この内、正式な国交があったのはオランダと朝鮮に限られ、それ以外の国とは私的な貿易関係であった。朝鮮との外交・貿易関係は、中世以来の伝統で対馬藩が独占的に担い、その利潤を組み込んで高い領知高を幕府から与えられていた。このため、朝鮮語の修得は対馬藩において積極的に行われることになる。

江戸幕府が必要とした外国語は、蘭語と清語であった。蘭語は、長崎のオランダ通詞によって担われた。オランダ通詞は、通訳や貿易業務、オランダ船がもたらす海外情報の報告書であるオランダ風説書の翻訳を職務とする幕府の役人で、大通詞四人・小通詞四人・稽古通詞若干名と通詞目付、貿易業務を行う数十名の内通詞からなっていた。通詞を勤める家柄は約二〇家あり、世襲制であった。出島の会所や出先機関の通詞部屋に勤務する他、オランダ商館長（カピタン）の江戸参府に随行するなどした。一方、清語の通訳を担ったのは、唐通事である。唐通事は、通訳・貿易業務の他、中国船がもたらす唐船風説書の翻訳や中国船への貿易許可証である信牌の発給を職務とし、大通事四人、小通事五人、稽古通事、稽古通事見習と唐通事目付、風説定役からなっていた。役料はオランダ通詞より高く、家数も約七〇家あり、中国人の居住施設である唐人屋敷に会所が置かれていた。

こうした「鎖国」体制下においては、世界情勢は「風説書」によってもたらされる情報で知る以外なく、公的に必要とされる外国語も蘭語・清語・朝鮮語と特定の言語に限られることになった。

洋学のおこり

八代將軍吉宗は実学を奨励する政策をとり、キリスト教の国内への浸透を防ぐために制限されていた洋書の輸入を緩和した。これをきっかけにして、蘭語で記された書物を通して、西洋の学術書が輸入され、医学・天文学・暦学な

どの分野で洋学が盛んになった。

さらに、十八世紀後期には北方のロシアが蝦夷地をしばしば脅かすようになる。一七九二（寛政四）年にロシア使節ラクスマンが根室に来航して通商を求めた。ついで、一八〇四（文化元）年にはロシア使節レザノフが、ラクスマンの持ちかえった長崎への入港許可証（信牌）をもって長崎に入港したが、幕府の冷淡な処遇にあい、その報復としてロシア船が樺太や択捉を攻撃する事件が起きた。こうした緊張情況のもとで、幕府は千島や樺太の調査を行い、蝦夷地を直轄とし、沿岸防備を強化する一方、世界地誌への関心を高めた。

一八〇七（文化四）年十二月四日、幕府は林大学頭述斎じゆさいから天文方の高橋景保に「蛮書を以て地図等仕立て申すべし」（前掲『天文方関係史料』四〇ページ）と命じた。そこで、蘭書を翻訳する能力のある人材を求め、長崎のオランダ通詞馬場貞由ばばさだゆを江戸に呼び、天文方出役しゅつやくを務めさせることになった。馬場貞由は、ケンペルの『日本誌』を翻訳した蘭学者志筑忠雄しづかただおの門人で、当時二十二歳であった。この世界地図補訂事業は、一八一〇（文化七）年三月に「新訂万国全図」という名称で出版された。また、この間に高橋と馬場は、ロシアの脅威に対処するという要請に答えるべく、『北夷考証』や『帝爵魯西亞國誌』などロシアの地理書を抄訳している。

もともと天文方は、編暦を行うために一六八四（貞享元）年に渋川春海しぶかわはるみが任じられ、一七四四（延享元）年から常置された幕府の役職であるが、西洋暦学の知識を必要とすることから蘭書を読む能力が養われていた。そのため、対外的危機に直面した幕府は、新たに海外の事情や地理についての知識を得るための蘭書翻訳事業を、この役職の職務として求めるようになったのである。

こうした傾向はさらに推し進められ、一八〇八（文化五）年十二月二十八日付で天文方に蘭書の取扱方が正式に命じられ、翌〇九年正月二十八日付で「林大学頭相調候地誌御用の内、異国に携り候儀同人申談じ取調べ申すべし」

〔前掲「天文方関係史料」四〇ページ〕と、林述斎によって進められていた地誌編集事業の内、「異国」＝外国に関わる部分は高橋景保に任せられることになった。そして、一八一一（文化八）年三月に始められたシヨメール『百科辞典』の翻訳事業を契機として、蘭書翻訳という職務を担う部局が天文方に新たに創設されることになったのである。この時、高橋景保に「蘭書和解御用」（『天文方関係史料 山路弥左衛門』二七ページ）が命じられ、先のオランダ通詞馬場貞由と蘭学者大槻玄沢を「蘭書和解御用手伝」とした。この辞典が『厚生新編』として訳出されたあとも天文方における翻訳事業は続けられ、この職務がのちの「番書調所」に引き継がれることになるのである（以上新村出「蘭書翻訳局の創設」『新村出全集』第六卷、筑摩書房、一九七三年を参照）。

三 洋学研究・教育機関設立の要請

ペリー来航と洋学の必要性

一八五三（嘉永六）年六月三日、ペリーが来航し開国を要求した。幕府には「鎖国」という祖法を脅かす最大の危機を迎えたが、同時に一挙に多くの外交文書を処理する必要性に迫られることになった。当面、幕府は従来の天文方の「蘭書和解御用」の人材を増強して緊急事態に対処した。まず、建前上外交文書を扱う任務を負うべき昌平坂学問所の林大学頭建など六名の儒者と、高橋景保がシーボルト事件で処罰されて以来「蘭書和解御用」を引き継いできた天文方山路弥左衛門諸孝を「異国書簡和解御用」に任命し、山路の手付として蘭書和解御用を行ってきた箕作阮甫や杉田成卿らの「蘭書和解御用手伝」を外交文書翻訳に当たらせた。さらに、同年末から津山藩医箕作秋坪、福井藩士市川斎官なども「和解御用手伝」に加えていった。